

私と社会の「よって立つところ」

うえひろえいじ
上廣榮治

日本の世帯に大きな変化が起こりつつあるようです。新聞によれば、平成十二年度の国勢調査などをもとに四十七都道府県別の世帯数を推計していくと、二十年後には、全都道府県で一人暮らしの世帯が最も多くなると予測されるということです。

近年、夫婦と子ども一人という家庭が多くなって、少子化が問題になっていますが、数年後には、そうした家庭も減少して、夫婦だけの世帯や一人暮らしの世帯のほうが多くなり、二十年後には、ついに一人暮らし世帯が第一位になってしまうというのです。

そうなる理由はいろいろです。まず、子ども一人の家庭から子どもが独立して夫婦二人となり、やがて夫婦のいずれかが亡くなって、高齢者一人の世帯になる場合です。また、離婚率の増加も一人世帯を増やしています。さらに、結婚しない人たちの一人暮らしの増加があります。

これは由々しい大問題だと私は危機感を覚えています。なぜなら、「世帯」は残るものの、この社会から急

速に「家庭」が消滅しようとしているからです。

「家庭」とは、夫婦、親子などの家族の集まりのことです。夫婦が子どもたちを育てている場、または、育てた場、あるいは、これから子どもを生み育てようとしている場が家庭です。つまり、家庭とは、あくまでも子どもを育てることを前提とした生活の場なのです。その、子どもを育てる家庭が激減しつつあるということは、この社会が消滅へ向かって衰退していくことを意味します。

わが会の創立六十周年を明年に控えて、私はわが会とこの社会のよって立つところ、あるいは私自身のよって立つところを見極めたいと、いわゆる禪でいうところの「照顧脚下」(汝の脚下を照らせ)を行じようと、及ばずながら努めてきたつもりであります。

そして、まことに平凡な結論、平凡であるからこそ、誰でも納得せざるを得ない結論に達したのです。すなわち、私たち一人ひとりがよって立つところであり、この社会がよって立つところとは「家庭」をおいてほかにないという結論です。とすれば、わが会がよって立つところの根本もまた「家庭愛和」である、ということがあります。

そもそも私たちは何のためにこの世に生まれ出たのでありましょうか。果樹がたわわに果実を稔らせるのと同じ理由によるものです。すなわち、生物が子孫を繁栄させるために生まれ出るといふ、その同じ大自然の摂理の下に、私たちはこの世に生まれたのです。

この世に生を享けた私たちは、独立して社会生活を営むことができるまで、父母に育てられます。そして、独立して家庭をつくって子をなし、子どもたちが自立できるようになるまで育みます。

さまざまな事情によって、自分では家庭を持つことがなかったとしても、人は誰でも仕事を通して、同じ社会に属する人々が家庭を持ち、子どもを育て上げることを支えます。なぜなら、あらゆる仕事はみな、

人々の生活の利便を図り、子どもたちの未来を明るくするためにあるものだからです。すなわち、この世で働くということは、ただ生きるためだけではなく、自分が属する社会を喜び深いものとして、子孫の繁栄に寄与することでもあるのです。

人間は遠い祖先の時代から、「自分が生まれてきたわけ」や「今を生きる意味」について、さまざまに考えを巡らせてきました。「自分の仕合わせの実現のためだけに生きるのだ」という、極端な個人主義的な説もありましたが、どんな説をひねり出そうとも、生物は子孫を残そうとする存在だという、大自然の摂理を超える理由を見出すことはできませんでした。

では、人間とはどのような形で子どもを生み、育てようとしてきたのでしょうか。すべての時代とすべての地域において、人々は「家庭で」子どもを育ててきたのです。その家庭を守り助けるために、社会が生まれたのです。社会に守られ助けられながら、家庭が子どもを生み育てる。それが人間の歴史の底流であり続けたのです。

つまり、社会のよって立つところとは、家庭なのです。そしてまた、私たちが日々を為すことも、すべては第一に家庭と子どもの安寧あんねいと発展を目的としています。つまり、私たちがよって立つところもまた、家庭にはかならないのです。

このことは、つい二、三十年前までは、誰もが確かに自覚していたはずなのです。戦後まもなく『戦没農民兵士の手紙』(岩波新書)とか『きけわだつみのこえ』(岩波文庫)などの戦没者の遺稿集が刊行されましたが、そこに記された彼ら兵士の「死に行く理由」は、ほとんど愛する家族の未来を守るためであったのです。その思いは戦後も脈々と受け継がれてきたことは確かです。それがいつしか、私たちの社会と私たちは、その「よって立つところ」を見失おうとしているらしいのです。

国勢調査をもとにした「年齢別に見た未婚率の推移」によれば、三十歳から三十四歳の男性の未婚率は、一九八〇年代に二〇パーセントを超えてから急上昇して、二〇〇〇年には四二・九パーセントに達しています。女性の二十五歳から二十九歳の未婚率も同じ時代に急増して、二〇〇〇年には五四パーセントにも達したのです。

時代は大きく変わりました。家庭は急速に減少しています。多くの人がはや必ずしも家庭が必要だとは考えなくなりました。では、私たちは「家庭愛和」を活動の中心に据えることをやめるのでしょうか。答えは否です。もし、結婚や子どもを持つことの否定が流行しているのなら、私たちはなおさら力強く家庭愛和の実現を推進しようと思うのです。なぜなら、私たちがよって立つところは家庭であり、この社会がよって立つところもまた家庭であるからです。私たちと社会の未来は家庭にこそあるからです。

子どもたちも独立し伴侶も亡くなられたことよって、心ならずも一人世帯を余儀なくされている方々にも、ぜひわが会の会友になつていただいて、家庭を取り戻していただきたいと思ひます。会場を家庭にしたいいただきたいと願うのです。会の活動を通じて、社会の子どもを立派に育んでいただきたいのです。

お年を召して会場において願えない会友のところには、子どもたちがお訪ねできるような仕組みができればと、私は願つております。長い人生経験を次世代の教育のために生かしていただきたい。子どもや孫の世代に、家庭愛和の大切さを教えていただきたいと思ひます。

私たちは時代の変化に鈍感ではなりません。しかし、時の流行に媚びようとは思いません。もし、時の世相が大自然の摂理に適つていれば、諸手を挙げてその推進に協力しますが、人間がよって立つ足元を忘れるような不自然な流行には、断固逆らわなくてはなりません。大自然の摂理の下に「我も人もの仕合わせ」を実現すること、それがわが会の根本の願ひなのであります。